

非認知的能力の成長・発達

——仏教、キリスト教、量子力学との邂逅——

学長 高見 茂

みなさん、こんにちは。令和四年度の学長講話を始めたいと思います。学長の高見と申します。みなさんとは入学式の時にお目に掛かりました。本来でしたら講堂で、対面ですせていただくところですが、コロナが蔓延しておりますので、感染防止の観点からオンデマンド型の配信ということになりました。

新入生のみなさんにどうい話をするか考えておったんですが、「非認知的能力の成長・発達」について少し勉強していただきたいと思ひまして、この話をすることにしました。非認知的能力の成長・発達と、仏教、キリスト教、科学的なことも含めて話をしないといけませんので、「量子力学との邂逅」を重点的にお話ししたいと思っております。非認知的能力とは一体何なのか、非認知的能力がどのくらい重要なのか、そして最後に、仏

教、キリスト教、量子力学と、非認知的能力とがどのように関わっているのか、「仏教、キリスト教、量子力学との邂逅」という三つの柱で今日はお話をさせてもらいたいと思っております。

まず最初に、非認知的能力とは一体何ぞや？ということなのですが、人間の能力は二つの要素からなっています。一つはみなさんご承知おきいただいていると思います、IQと言われる知能指数です。学力ですね。これは「認知的能力」と言われて、学科目の定期試験、実技試験、実力試験、入学試験……、いろんな試験の結果、「何点」と数値化が可能な能力です。そして、人間の能力のもう一つの柱が、気質、性格等、目に見えない力の総称を指す「非認知的能力」です。人間の能力は、数値化ができる認知的能力と、気質、性格等、目に見えない力の総称である非認知的能力の二つから成っているということ、まずご理解いただきたいと思います。

従来の教育現場では、どういうところに注目しているか、どこに焦点を当てているか、というと、皆さんもちよっと前まで受験生だったわけですけど、とかく、認知的能力の向上に焦点が当たっております。いわゆる学科目。数学、英語、理科、社会、国語……、こういう学科目の成績を学力テストで評価していました。入学試験はその認知的能力を計

る典型です。ところが最近では、非認知的能力の方が、将来の経済的・社会的な成功に大きな影響を及ぼすという研究成果が数多く報告されて、世界的に注目されるようになってきました。研究成果の蓄積が相当進んできたんですね。

それでは、非認知的能力の自身にはどんなものがあるのか。「思いやり」「協調性」「やり抜く力」「社交性」「自制心」……こういうものです。これは、単なるテストの成績だけではなくて、人間が生きていくために大切な能力全般を指しています。特に近年、幼児教育に積極的な投資をしたり、OECD（経済協力開発機構）はこの能力を「Social and Emotional Skill：社会情動的スキル」と位置づけて重視するようになってきています。従いまして、最近では入学試験で、当日の試験の結果だけではなくて、他の部分にも注目して合格を判定する動きも出てきています。非認知的能力の重要性がある程度みんなに承認されて、その重要性が認められてきたということだと思います。

これは週刊東洋経済に出ていた図です。いわゆる、IQ、学力、記憶力などを示す認知スキルと、思いやり、協調性、自制心、勤勉性、自尊心、信頼、意欲、社交性、やり抜く力など、非認知的スキルの足し算、これが人間の総合力だということなんです。我々が今まで重視してきたのは認知的スキルです。テストの点が良い、学校の成績評価が良い……、と

大抵は見ているわけですが、非認知的スキルも無視できないし、最近では、むしろ、こちらの方が重要だという意見も出てきています。認知スキルがしっかりしていたら、非認知的スキルを強化することに繋がってくるのが研究でわかってきたんですね。

この非認知的能力がいかに重要か。アメリカ・シカゴ大学のジェームズ・ヘックマン先生はノーベル経済学賞をとっておられる方ですが、非認知的能力と将来の成功との因果関係を、幼児期からの追跡調査で明らかにされました。非認知的能力が高い人が将来成功している。いわゆるテストの成績じゃない。学力ではない。非認知的能力の方が大事だということを見ました。

それから、アメリカ・ペンシルベニア大学のアンジェラ・ダックワース教授は心理学の専門家ですけれども、人生における成功の秘訣、目標に向けて努力し続ける資質として、「やり抜く力 (GRIT)」を挙げられました。GRITは英語の単語の頭文字を四つ合わせたものです。ダックワース教授は元々高等学校で教鞭を執っていたんですが、自分の教え子の中で、学科目の成績が非常に優れているのに将来成功できていない人がいるのに対して、いわゆる学力は低いんだけども将来成功している人もいます。その両者を比較してなぜ差が出てきたのかを大学院に入っているいろいろな研究されたんです。そして、目標に向かって努

力し続ける資質を持っているかどうかが決定的な違いだったということを見られたんです。「G」Guts（ガッツ）度胸があつて何でも恐れずに向かっていく、「R」Resilience（レジリエンス）復元力、撃たれ強い、ダメでももう一回立ち直る、「I」Initiative（イニシアチブ）率先してトップランナーで走っていくという気概、「T」Tenacity（テナシテイ）執着心をもつて、どうしてもやり遂げるといふ思い。これを持っていると成功している人が多いという事実を発見されたわけです。これはみんな非認知的能力に入っているのですから、これがあるかないかが人生で勝ち残れるかどうかの大きな違いになってくる。決して学力が全てじゃないんですね。

この非認知的能力の重要性がどういふきっかけでわかってきたかですが、ヘックマン教授は、アメリカで、一九六〇年から開始されていた「ペリー就学前プログラム」の教育結果を四十年に渡って調べました。低所得のアフリカ系の三〜四歳の子どもたちに、就学前教育、いわゆる幼稚園教育を受けた子どもと、受けなかった子どもの後の人生がどう変わっていったかを、十年ごとぐらいに比較したんです。就学前教育を受けた、行政がきちっと対応した集団は、その後の学歴・収入・持ち家率が、教育を受けなかった人たちと比べたらかなり高い。犯罪歴、薬物による逮捕も極めて低かったんですけど、教育を受け

なかった集団は、元々の親の社会階層から抜け出すことができなかつたんです。四十年以上、大人になってからどんな人生を歩むかを、よくアメリカで追跡して調べたと思うんですが、非認知的能力を発達させるような機会に恵まれた子と、恵まれなかつた子の間で大きな違いが出てきたということです。

そして、ヘックマンの研究でもう一つ注目されたことは、学力以外の能力、非認知的能力です。就学前教育、幼稚園にきちんと行った子どもたちは、学力、IQは向上しましたが、八歳前後、小学校一〜二年生ぐらいになると、就学前教育を受けなかつた子どもとの間で差はなくなってしまうんです。なのに、将来の人生は大きく違っていた。では何が人生の成功因なのか。非認知的能力をどれだけ発達させていたか、ここが全てを握っているということになったわけです。ダックワース先生は、「やり抜く力」を測るテストを実施しました。そうすると、GRIIの強さとIQの相関は否定されて、GRIIの強い人はその後の成績も伸び、積極的な行動を取るなど成功の原動力になっているという研究結果が出てきました。幼稚園教育をちゃんと受けた子は早く学力が高まる。受けなかつた子どもも八歳ぐらいで追いつく。だけど、長い人生を見たら決定的な違いがあった。非認知的能力がどの程度発達したか、強化されたかということが人生の成功に繋がっているとい

うことです。

これと似ていますが、アメリカ・デューク大学教授モフィット先生も、ニュージージーランドの子ども一〇〇〇人を三十年間追跡していて、子ども時代にセルフコントロール力（自制心）、我慢をする力の強かった人は、人生の成功確率が高いという研究結果を出しています。将来の大きな目標のために、目の前の小さな報酬や誘惑に負けない人は、結果的にやり抜く力（GRIT）も強いということになるんですね。

モフィット先生は、子どもの将来はセルフコントロール力（自制心）で決まる、その証拠としてこの表を出しています。三十年後の富裕度です。縦軸は成人後の富裕度、横軸は子ども時代のセルフコントロール力です。子ども時代のセルフコントロール力が高い人は、家計困窮度、経済的に苦しい状態になる確率が低い。所得、社会的地位も同じです。子ども時代にセルフコントロール力が低かった人は成人後の富裕度も低い状態になりますので、非認知的能力は非常に大事だとなってくるわけですね。

では、このセルフコントロール力が高められるのか。生まれついでのもの？という話にもなってきます。幼児期にしか獲得できないのかと、幼稚園の時期にちゃんとやっておかないとダメなのかと、なってしまうがちですが、この研究によりますと、年齢に関係な

く、意識すれば高めることができるということです。皆さんは今二十歳前後ですから、あと十年、人間の脳は三十歳くらいまで成長発達しますから、意識すれば非認知的能力は高めることができるんです。悲観することは全くありません。やり抜く力（GRIT）や自制心（セルフコントロール力）は鍛えることができます。良いですよ。機会がまだまだあるということだから、私たちは最後までやり抜くという気持ち、我慢して頑張る気持ちを常に持つことが必要ではないかなと思います。

では、やり抜く力（GRIT）や自制心（セルフコントロール力）をどう鍛えたら良いのか。低いレベルでの妥協点じゃダメです。でも、あまり高いと実現できなかった時の挫折感が大きいですから、頑張れる参照点（水準）を少し引き上げた計画を立てて欲しいと思います。そこで三つの大事なポイントがあります。習慣化する、将来の目標に対する内発的な動機を整える、そして、家族、周囲の影響も非常に大きいです。この条件が整っていれば鍛えることができます。例えば、朝六時に起きるとか、甘い物は食べないとか、簡単なことでもいいですから、習慣化して継続する。これをやっていただきたいと思えます。それからちよつと高めの将来の目標を決めたら、そのモチベーションを持ちつづけること。当たり前のことですけど、意志力の持続、維持が極めて大事です。それから、家族や周囲

の環境ですが、節制の効いた前向きな人が周囲に多ければ、自制のレベルは高まると言えると思います。自らが努力をして、環境を整えていければ、非認知的能力を伸ばせるということですよ。

ここに、「セルフコントロール力（自制心）を測ってみよう！」という表があります。良かったらここに自分の得点を書いてみもらったらいいと思います。得点が低い方が自制心が高いということです。七〇点満点で四〇点を超えていたら自制心が不足しているということです。これは、大阪大学経済研究所の池田先生が作られた表で、よく使われていますので、興味があればやってみていただきたいと思っています。

さあ、私たちの大学は仏教精神に基づく教育をしていますので、それとどう結びつけるか。仏教だけではなくクリスチャンもおられるだろうから、宗教と非認知的能力はどう関わってくるのかを考えなくてはいいけません。今流行の量子力学、ミクロ世界での物質の運動法則は、私たちが日夜生活しているマクロの世界の物理現象とは全く違った原則で動いています。そして、やはり非認知的能力と関係があるんですね。今日の三つ目の話の柱について、みなさんに具体的なケースを引きながら話をしたいと思っています。

非認知的能力は、やり抜く力とか、自制心とか、勤勉性とかでありますけれども、これ

は全て、「心」と関わる問題です。心は言い換えますと「想念」です。これはどちらの漢字にも下に心が付いています。念を送る、念ずる、という言葉があります。見ていただければわかりますが、「念」は「今の心」と書きますよね。ですから、非認知的能力は心と近いところにあるのがわかります。これは『華嚴經』でしたか、仏教の經典に「三界は唯心の所現」人間が五感をもって認識できる世界は三つ（欲界、色界、無色界）あり、その世界は心の中の想いが現象化したものである、と書いてあります。「三界は虚妄にして但だ一心の作るところ」現象界、人間が認識できる世界は、心の中の想いが現象化する、具体化したものだ、ということが仏教の經典には書いてあるわけです。心の中で思っていることが現象として、自分達が認識できるように状態で出てくる。ですから、心の中で「最後まで頑張るぞ」「やり抜くぞ」と、遊びたいけど目標に向かって精一杯頑張るという想いがあれば、自分が理想としている世界が具体的に現象化してくるといふ流れになるんだと思います。

『聖書』にもこれに通ずるような話があります。みなさんの中には日曜学校とか行っておられる、クリスチャンの方がおられるかもしれませんが。『旧約聖書』（創世記の第一章一節から八節まで）にどのようなことが書いてあるか。この中で一番注目すべき内容は「神

光あれと言ひ給いければ光ありき」です。神様が「光出てこい」とおっしゃったら光が出てきたと書いてある。同じ様なことが『新約聖書』（ヨハネによる福音書 第一章一節）にもあります。「はじめに言（ことば）ありき 言は神とともにありき 言は神なりき」。ここにいう言（ことば）は、私たちが意思疎通のために使う言語とはちよつと違います。宗教哲学の人達は、ギリシャ語の「ロゴス」にあたる、神様の人格、神様の智慧、神様の意志の表れだと言っていますが、この世の中ができた時、始めに神様が「光あれ」という意志を持たれた。それで光が出てきたということです。一三八億年前にビッグバンが起って、急速に宇宙が膨張して、初期の銀河ができて、ファーストスターが光り出した、ということまで分かっていますでしたが、そのビッグバンが起って間もなく光り出した星が、最近とらえられたそうです。ビッグバンが起こって九億年くらい経ってからですから、一二九億年ぐらい前の宇宙の状態が観測された。今はもう現実にはその星はないかもしれないけど、光が届いたんですね。最初に光った星は何色か、コンピュータでシミュレーションをしたら青色だったことがわかりました。しかし、『聖書』が出来た時代に宇宙観測はできていません。「神光あれと言ひ給いければ光ありき」をどう知ったのかわかりませんけれども、神様の思いが光をつくった、ということが『聖書』に出ているんです。これは、

先ほど申し上げた仏典の「三界は唯心の所現」と同じです。仏教とキリスト教の説いている真理は、宗教哲学の観点から、ほぼ同じと考えることができます。

どうしてこういう考え方が成り立つのか。ギリシャ時代の哲学者は、全ての物（物質）は、「形」が存在する前に「考え、想念」として存在していたと考えていました。ですから、旧約聖書の天地創造の物語でも、勝手に作ったわけではなく、神の「考え、想念」で世界が創造されたということです。考えや想念があつて我々の目の前の物質が出てきた。今、みなさんが私の話を聞いてくれているPCも、「PCを作ろう」という人間の意志があつて、形となつて出てきているということです。絵を描く、詩を作る、粘土細工で〇〇を作る、家を建てる……ということも、元々そういう考え、想念、意志があつたんですね。こういう家を建てたい、こういう間取りにしたいから、設計図を描いて具体化していく。つまり全部、自分の心、想念が現象化したものです。そこには「意志」が入っているということですよ。これは、仏教も、キリスト教も、同じです。そして、これがマイクロの世界、量子力学とどう関わるかについて、少し説明をしておきたいと思います。

話が難しくなるかもしれませんが、今、私たちの目の前にある物体、地球、月、太陽……、それから私たちが目にするマクロの物理現象は、ニュートン力学で説明がつかます

が、物質を構成している、細かな、細かな、超ミクロの世界の中では、マクロ世界のニュートン力学では説明ができない、全く違う原理が働いています。それが量子力学という学問体系なのですが、有名なニールス・ボーアとか、いろんな有名な学者がおりまして、二十世紀になってはじめて理論的な分野として確立してきました。

まず、物質は、原子、その原子は原子核と電子から成り立っていて、その原子核の中には陽子と中性子があつて、その中性子の中にクォークがあります。量子そのものは粒子と波の性質を両方あわせ持っている、とても小さな物質とかエネルギーの単位で、ある時は物質化して粒子であるけれども、ある時はエネルギー、波として存在するという特徴を持っています。物質を形作っている原子そのものとか、原子を作っているさらに小さな電子・中性子・陽子とか、光を粒子としてみたときの光子、あるいはニュートリノやウオーク、ミュオンといったような素粒子も全部、この量子に含まれています。原子、原子核、電子、陽子、中性子、クォークは全て量子と呼ばれるものです。

次に、量子はどんな特徴を持っているか。二重性です。もう一つ特徴があるんですけども、今日はちょっとおいておきます。量子の二重性は、「波」であり「粒」である、両方の性質を併せ持っているという特徴があります。波はエネルギー、粒は物質です。我々

が日常、目にしてしているものは、このどっちかしかないんですね。波は波、粒は粒、両方はないんだけど、超ミクロの世界ではこれを併せ持っているんです。

そして、超ミクロの不思議なふるまいにどういうものがあるかというところ、ここに「光の観察問題」と書いています。高等学校の物理の時間に習われたかもしませんが、光は「粒」なのか「波」なのか。光子は量子の中に入りますから二つの性質を併せ持っています。人間が観察する（見てやろうという意識が入る）と「粒」になります。光子に「粒」としての性質が出てくるんですね。逆に人間が見ていないと「波」としての資質が出てくる。これは非常に不思議です。我々の日常、マクロの世界ではこんな現象はありません。つまり、量子の状態では何も確定していないということです。すべての状態は「確率」として存在しています。「粒」である確率が五〇パーセント、「波」である確率が五〇パーセント、どっちになるかは人間の意識が入っているかどうかで決まるといふことです。

この図を見ていただくとお分かりいただけれると思います。私たちが住んでいるのはマクロの世界です。存在する確率は、あるか、ないか。一〇〇%か、〇%か、です。私の目の前に、ペンがあるか、ないか。どこかにいつていたら「ない」、ここにあれば「ある」。この認識しかできないんですね。観測されても状態は変わりません。重なり合っている状

態は見られないんです。ところが、量子の世界、ミクロ（微視的）の世界では、存在確率が五〇%、先ほどの光子の場合では「粒」であるとも「波」であるとも捉えることができず。そして、そこに人間が観察する（意識を向ける）と状態が変化します。「粒」になっちゃう、物質化する。見ていなくなったらエネルギーの状態ですから「波」のままです。この二つの状態が重なり合っているのがミクロの世界です。私たちが見ているのはマクロの世界だから、ミクロの世界のことは信じられないんだけど、現実実験してみるとそうなっているということですよ。

シュレディンガーの猫は、異次元世界とか多重世界の話になってややこしいので今日は話をしませんけれども、例えば、我々が家で飼っている猫を考えていただければ、私たちの現実世界では、生きている猫か、死んでいる猫か、のどちらかです。この認識しかできないんですけど、ミクロの世界では、生きている状態と死んでいる状態が重なりあった状態の猫が存在するという話しになるわけです。人間がどういう精神状態にあるかによって、どっちかに決定されるということです。これが非常に不思議なんですね。だから、心の問題、想念の問題が大事だよということになるんです。ミクロの世界では摩訶不思議なことが起こっています。

今日のまとめとして、量子の世界と、仏教、キリスト教の世界には強い相関があるということが、ちよつと、おわかりいただけたんじゃないでしょうか。量子の世界を覗いてみると、物事は、始めから決まっている（実在する）のではなくて、観測によって、人間がどう意識するかによって決定するということです。ここが大事です。仏教には「三界は唯心の所現」と書いてあった。キリスト教の旧約聖書、新約聖書にも、神の意思、想念が我々の世界を創った、と書いてあった。物事が出てくる前には、想念が出来上がっていると見るわけです。物事は始めから決まっているわけではありません。自分たちがどういう意識を持つかによって決まる。「波」か「粒」か。意識の影響、重要性の認識が非常に大事ということですよ。

何度も言いますが、ミクロの世界では「人間の意識」が物事の状態を決定します。ということ、意識とか、想念とか、心のあり方が、私たちの境遇とか環境を決めてしまうこともあるんじゃないかと思えます。いわゆる、最後までやりぬく力、自制心、我慢できるか、勤勉に努力できるか、という非認知的能力の状態と関連するということです。私たちの身体を作っているのはタンパク質ですけれども、そのタンパク質も原子からなっているわけです。でも、その中の、中の、中の、小さいものは量子によってできているのだか

ら、自分の想い、意識、をしつかり持つて、「こうしたい」「こうありたい」という心のありよう、Mind Set の転換が重要だと思えますし、GRIT を持つて努力を続けていくことが極めて大事だと思っております。

ここに書いています、「一万時間のかべ」というのがあります。努力してるんやけど、なかなか成功しない、思うようにならない、やってもアカン、と諦める人が結構いるんですね。私の知っている人で、京都市内にある大学の、学長、理事長、学園長、教授、学生部長、五つくらいの仕事を独裁でやっている九十二歳のおじいさん先生がおられるんです。この人がどういう根性を持っているのか聞いてビックリしたんですけど、「自分はおみくじでも大吉が出るまで引き続ける」と。これこそすごい GRIT を持つている人だなと思っただんですけど、一万時間の壁、これが本当に大事なんです。人が何かに習熟して一流になるのにかかる時間は一万時間だと言われます。ですから、皆さんも光華で頑張つて専門職を目指す、資格試験、国家試験を突破するんだったら、一万時間やり続けるという気持ちを持つてください。

マルコム・グラッドウェルは、これを理論的に解明しています。スポーツ選手とか、ビジネスマンで、一流と言われる人がいますよね。世界のピアノコンクールで優勝したと

か、オリンピックで金メダルを獲ったとか。「天才」「一流」と呼ばれる人たちがその地位にのぼりつめた背景を、マルコム・グラッドウェルはずっと調べてみたんです。何で成功できたのか。天才で何も努力していない人は一人もいなかった。ものになったのは一万時間継続している人です。

今後、なかなか国家試験をクリアするのは難しいと思います。でも、志を立てて、絶対に突破するという固い決心をして、一万時間のかべを乗り越える。これがやれるかどうかは全てです。やりきった人間は成功できます。科学的に実証されているわけですから。いわゆる、非認知的能力、やり抜く力、我慢する力、これが何よりも人生の成功の秘訣になっています。仏典にも「三界は唯心の所現」、聖書にも「神様は想念で世界を創られた」、想いは実現するということです。それゆえ、その想いを持ち続けるということが大事なのです。

仏典でも、聖書でも、「継続が大事だ」と言っています。仏教に『仏遺教経』という仏典があります。これは禅宗で非常に重視されている經典です。ここに「精進」という言葉や横綱に昇進した時に、相撲協会から使者が来て、師匠と女将さんにはさまれて口上を述

べる時に、「今後も精進をして頑張ります」と言っていますよね。その言葉が仏典にも出てくるんです。

もし勤精進を行せばすなわち事となして難き者なし。

(一生懸命努力を継続したら、物事を成し遂げることに難しいという人は誰もいない) この故に汝等まさに勤精進すべし。

(こういう理由があるから、皆さん一生懸命努力をし、精進を続けなさい。)

たとえば小水の常に流れば則ち能く石をうがうが如し

(例えば、ちよろちよろとした水の流れでも、ずっと流れ続けていれば石すら削って穴を開けるじゃないか。)

これは、お釈迦さまが亡くなる直前におっしゃった事をまとめた、最後の経典だと言われています。精進は、一生懸命頑張るという意味です。仏典に書いてあります。

聖書は、私は入学式の祝辞で、午前と午後の人たちにそれぞれ違った内容を引きましたので、皆さんは片一方しかご存知ないと思います。今日はその両方を入れておきました。

午前は、『ローマ人への手紙』（五章三節～五節）です。私も若い頃にいろいろ苦勞をしましたけれども、常にこの部分を何度も何度も読み返しました。

艱難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す。そして希望は失望に終わることはない

と書いてあります。非常に困難な状態は堪え忍ぶ力を生み出す。いわゆる自制心、我慢をするということです。忍耐をしたら練達、技量が上がるということです。自分に技量がつき、自信がついたら希望が出てくる。そして、持った希望は失望に終わることは絶対になり、と。神様はちゃんと見ておられますよと言っているわけです。だから、どんな困難なことがあっても、諦めずに最後まで継続して努力する、これが最後の勝者になるということです。

もう一つは『コリント人への第一の手紙』（一〇章一三節）です。

神は、あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と

同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである

この世界は神様がお創りになった。その世界に、悪いこと、マイナスなこと、ダメになることは絶対にないということを、元々のキリスト教は言っています。中世の墮落したキリスト教は信者を脅して「罪がある」とか言ってますけど、私はそうじゃないと思います。イエスがいた頃のキリスト教はそうではありません。神様の創られたものは絶対的に良いものである。悪いものは何もない。だから信じて頑張りなさい。試練があっても乗り越えられるはずだ、ということですよ。

非認知的能力が極めて大事であり、それがある人は必ず人生に成功できるわけですから、最後まで成功を信じて頑張っていただきたいと思えます。成功を勝ち取る事は必ずできるはずですよ。光華に入学されて、将来、専門職として身を立てる、あるいは実業界で活躍するという志を持っておられる方は、心の中で決心した事柄は必ず実現できるはずですよ。良い想念を持って、前向きに最後までやり抜く気持ちを持って、二年ないし四年間を頑張っていただきたいと思っております。

対面で皆さんに質問をお受けしたり、感想を聞いてみたりしたかったですけど、コロナ

ナの感染防止という観点から、オンラインになってしまいました。ここから少しでも学んでいただいて、今後の糧にいただければ私としては非常にありがたいと思っております。長時間のご静聴ありがとうございました。頑張ってください。それでは失礼いたします。